

「PE 分科会 30 年の歴史と背景を振り返る」

Looking back on 30 years of the PE-Session

慶応大学, 真壁利明

Keio University, Toshiaki Makabe

E-mail: makabe@keio.jp

「PE 分科会」が設立 30 周年という節目の年を迎えています。PE 分科のプラットフォームの上で、相変わらず活発な講演・質疑が行われていることを喜んでいます。この間、科学と技術の価値観は足早に推移し、研究者・技術者の世代交代も進み、第三世代への入替わりが進行中です。この 30 年間はどんな時代だったか、PE 分科会を取囲む周辺環境を思い出しながら振り返ってみたい。歴史的には、20 周年記念特別シンポジウムが 2011 年 10 に開催され、-研究会の設立から分科会への発展及び未来への提言-が、設立の中心にいた後藤俊夫氏(名大名誉教授)と、分科会で研究を先導された橘邦英氏(京大名誉教授)により「プラズマエレクトロニクス創設と発展」, 「分科会の設立・発展期の思い出と将来への期待」と題して講演され、成果や展望が具体的に語られている。

本講演では、プラズマという大樹のもとで研究や技術開発にあたられた PE 分科の会員が、どのような周辺環境のもとで成果を上げてきたか、できるだけ客観的なデータをもとに回顧してみたい。これが PE 分科で活躍中の諸氏の今後の研究やその運営に当たって糧となれば幸いである。

PE 分科会が遂げてきた発展は、プラズマの名を冠しているものの、「プラズマの機能の抽出」「プラズマを含むシステムデザイン」を底流に、他の専門分野と柔軟に学術融合を図り、基礎から応用まで幅広い分野の研究者が参集できるかたちのプラットフォームが実現されたことにあろう。

学問の基礎のないところに革新技术の開発はなく、明確な技術開発ターゲットがないところに基礎理論の開発も期待できないことを学んだこの 30 年であった。コロナ・パンデミックの続くなか、混迷の時代に入ったとの論調もあるなかで、過去に学びながら先端テクノロジーを使いこなし、限られた財のもとで、地に着いた研究が 21 世紀半ばに向け発展し、応用物理学会の社会先導がさらに進むことを期待してやまない。

